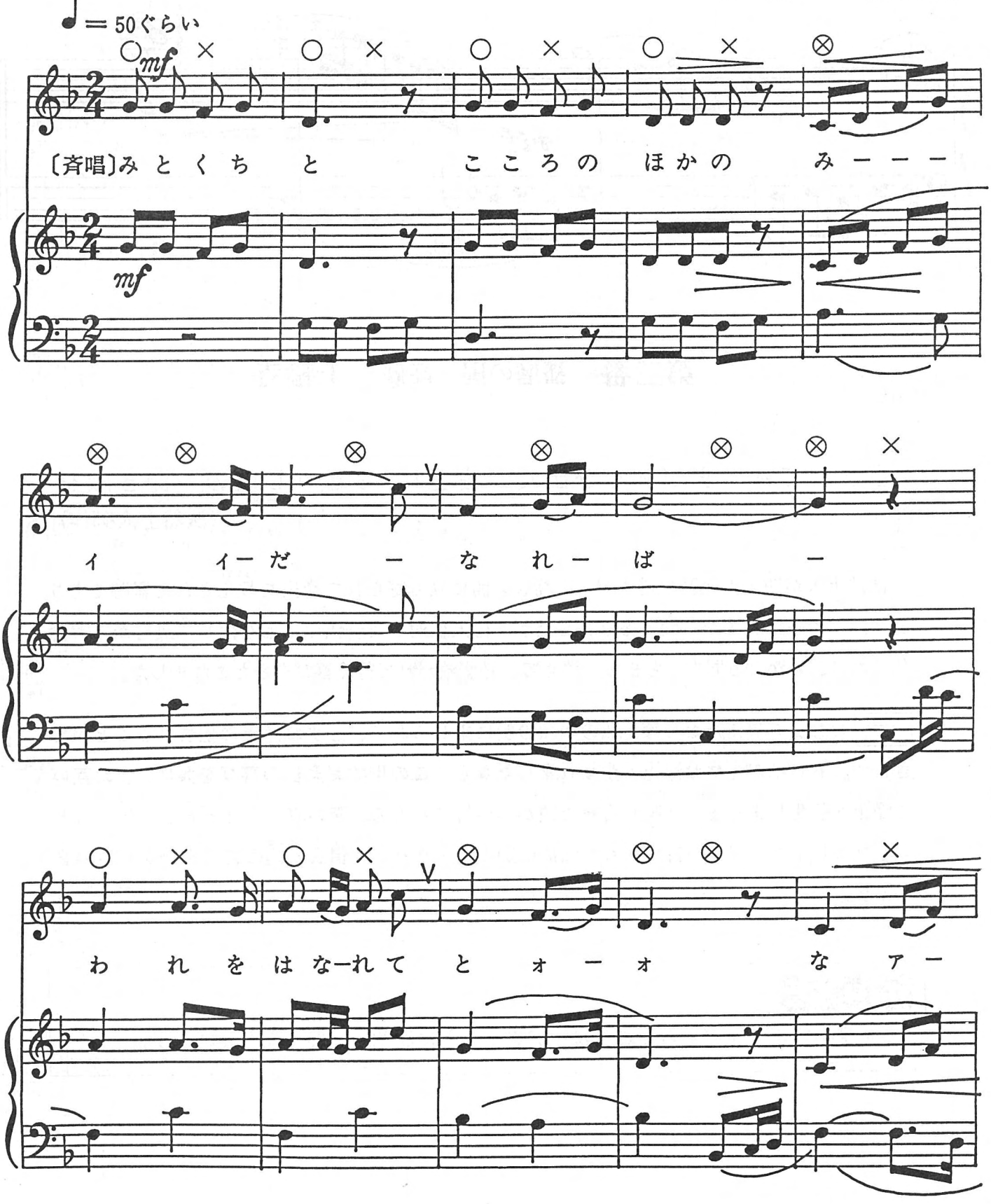
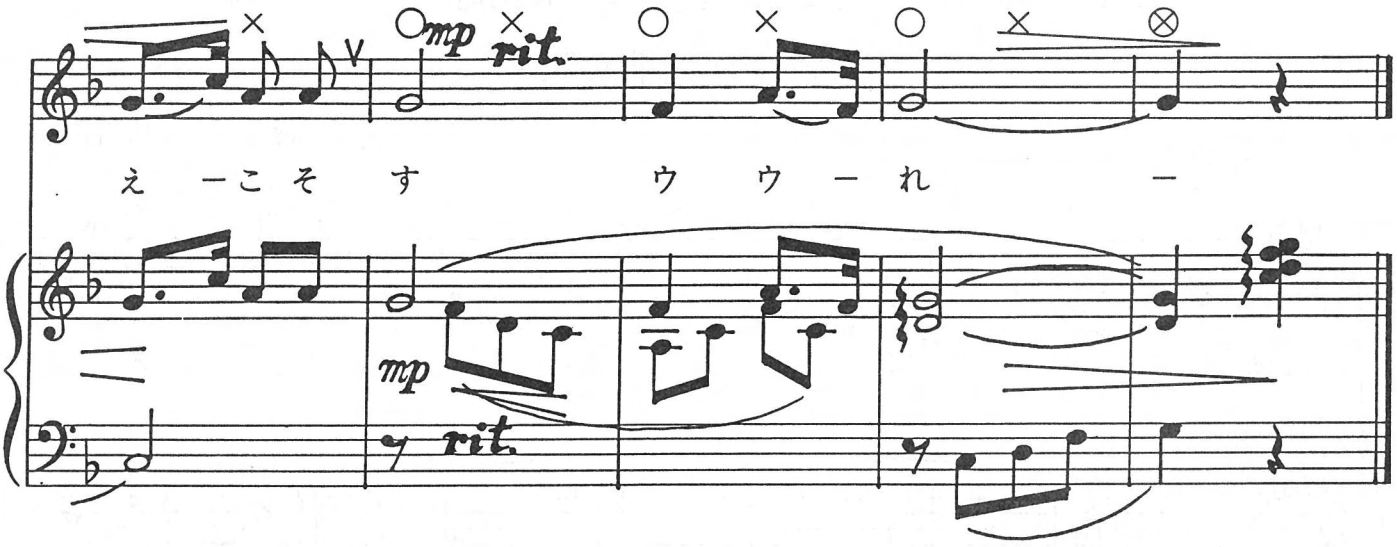
第四番　如来院の御詠歌（専念調）

松　濤　　基 作曲

第四番　摂津の国　如来院

身と口と　心のほかの　弥陀なれば　われをはなれて　唱へこそすれ

（法然上人御作）

私たち凡夫は、身で行う事、口で言う事、心に思う事、ことごとく地獄行きの業（ごう）であると教えられています。しかし、仏の救いは犯した罪の軽重にはかかわりなく、南無阿弥陀仏のお念仏の声を頼りに救いの御手を垂れ給うのであります。法然上人が四国ご流罪の砌（みぎり）、神崎の辺りで遊女が救いを求めました。上人は仏の慈悲を説かれて、ただお念仏することをすすめられました。教えを信じた遊女は、喜びと安心とで自分の黒髪をおろし、間もなくお念仏の声と共に命を絶ちました。その遊女の黒髪が、今もこのお寺に保存されています。

大意　阿弥陀さまのお慈悲は、身と口と心で犯した罪を問わず救い給うのであります。ただ南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、と唱えるお念仏の声のみが、救いの頼りであります。阿弥陀さまの本願力にすべてを頼み、お救いを信じてひたすら真剣にお念仏なさいませ。

ポイント注意

- ２拍子の曲。リズムを強調して歯切れよく。
- 「みだなれば」はのびやかに。
- 「われをはなれて」は力強く。